

[論文]

ヤーコブソンの交友関係から見たプラハ学派の文化的コンテクスト ——その幾つかの側面——

大平 陽一

1 はじめに：ヤーコブソンの映っている2枚の写真



[図1]

ここに1枚の写真がある(図1, Toman 1995: 134-135)。ブルノ在住のアヴァンギャルドの建築家イジー・クロハの邸宅で1933年に撮影されたものだ。左端に映っているのがチェコ・アヴァンギャルド最大の詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァル、その右でプールサイドに座っているのがチェコ・アヴァンギャルドの理論面における中心人物であったカレル・タイゲ、そしてワインの瓶を掲げているのが、この年ブルノのマサリク大学に職を得たばかりのロマーン・ヤーコブソンである。チェコ時代のヤーコ

ブソンについては、プラハ言語学サークルの主要メンバーとしての活躍が有名であるが、チェコにおいては前衛芸術家たちとの交友についてもよく知られており、彼自身、晩年の対談などで、この交友を誇らしげに語っていた。たとえば、ポモルスカが晩年のヤーコブソンとの対談に付した「後記」には次のようにある。

1920年にチェコスロヴァキアに着いてすぐに、ロマーン・ヤーコブソンはまず詩人や芸術家と親しくなった。彼が最初に親しくなったのは詩人のスタニスラフ・コストカ・ノイマンであった。ノイマンは彼がやっている雑誌にフレーブニコフ研究の序章と「芸術におけるリアリズム」のチェコ語訳を掲載してくれた。しかしヤーコブソンは、より若い芸術家たちの方にはるかに強い親近性を覚え、特に詩人のネズヴァル、サイフェルト、作家のヴァンチュラ、理論家カレル・タイゲと親交を結んだ。(ポモルスカ 1983: 181-182)

アヴァンギャルディストとの交友が生まれるに当たっては、ヤーコブソンがフォルマリストとしてチェコでも知られていたこと、それ以上にフレーブニコフ、マヤコフスキイ、マレーヴィチといったロシア・アヴァンギャルドを代表する詩人、画家たちと個人的にも親しかったという事実が、大きな役割を果たした。実際、ネズヴァルらがフレーブニコフやマヤコフスキイの詩について詳しく知るに至ったのには、ヤーコブソンからの耳学問が大きかったらしい。この点に関して、チェコのロシア文学者スヴァトニは、「ロシア移民の代表的存在のヤーコブソンは、チェコにおいて、革命によって弾圧された層の代表者ではなく、革命後の進歩的文学研究の使者として迎えられた」(Svatoň 2014: 8)と評しているし、小論においてたびたび言及することになるタイゲとの仲についても、ヤーコブソン自身つぎのように述懐している。

画家たち、芸術理論家たちと近い関係を取り結ぶということが、私の人生には多かった。理論家のなかで誰よりも親しくなったのはチェコの造形芸術および建築の理論家のカレル・タイゲで、彼とは仲良くつきあった。(Jangfeldt 1992: 26)

もう1枚の写真を見てみよう(次頁図2, Toman 1995: 134-135)。場所は同じくブルノだが、7年近く前の1926年の撮影。映っているのは左からヤーコブソン、言語学者ニコライ・トゥルベツコイ、民族誌学者のピョートル・ボガトゥイリヨフ、スラヴ文献学者のドゥルノヴォだ。厳密に言えばヤーコブソンはユダヤ人ということになるのだろうが、みなロシア人——十月革命後にロシアからウィーン(トゥルベツコイ)およびチェコ(他の3人)に移り住んできた研究者たちである。

右端に立っているドゥルノヴォはモスクワで職を失い、生活に窮したらしい。ヤー



[図 2]

コブソンの尽力でチェコスロヴァキア政府から獲得できた研究助成金を頼りにブルノに移り住み、研究のかたわら就職活動にいそしんでいた。結局チェコで教授職に就くことの叶わなかったドゥルノヴォは、1927年末にベラルーシに職を得て、ソ連に帰国したが、1933年には《内務人民委員部附属国家政治局》(いわゆるゲーペーウー)によって拘束されてしまう。その時受けた尋問でドゥルノヴォは「プラハの亡命ロシア人の多くは、ヤーコブソンをソヴィエトのスパイだと見なしていた」と証言したという (Toman 1994:41)。

先の引用文でスヴァトニは、「ロシア移民の代表的存在のヤーコブソン」と「亡命者」なる語を避けているが、実際、ヤーコブソンは公爵トウルベツコイのような「亡命者」ではなく、捕虜交換の交渉にあたるソ連赤十字使節団の一員としてプラハに赴任していた。インドジフ・トマンが指摘する通り、そもそもソヴィエト外交団で働いていたという事実自体が、通常の亡命ロシア人像と相容れなかったのである (Toman 1994:41)。ましてや、ヤーコブソンは当初からソヴィエトの革命文化の使徒を自認し、その姿勢を隠さなかった。彼が左翼系雑誌を中心に¹、ソ連のアヴァンギャルド芸術についての紹介記事や論文を発表していたことは、冒頭に引用したポモルスカの言葉からもうかがい知ることができる。ヤーコブソンをソ連のスパイではないのかという懐疑の目で見っていたのは、祖国を追われた亡命者だけではなくのも、当時の政治情勢からすれば当然であった。マサリク大統領から亡命ロシア人支援の実務面を任さ

れていたヨセフ・ギルサや首相のカレル・クラマーシュといった政府要人もソ連のスパイだと信じていたのだというのだから、さぞや窮屈な思いを強いられたことであろう (Toman 1995: 89)²。

確かに、政治的にも芸術面でも概して保守派の多い亡命者の間にアヴァンギャルディストと交流した人物は稀だ³。しかしアヴァンギャルディストと仲が良かったからといって、亡命者でユーラシア主義者として知られていたトゥルベツコイとヤーコブソンの親交が上辺のものに過ぎなかったというわけでは決してない。言語学史上類を見ない二人の盟友関係は、アナトリー・リバーマンが次のように語っているほどの間柄であった。

1914年の秋、モスクワ・フォークロア委員会での討論会でトゥルベツコイはヤーコブソンと出会った。その後、革命までの年月、二人は頻繁に会っていた。そしてともに亡命者 (émigré) となった1920年からは文通が始まった。トゥルベツコイの人生においてヤーコブソンの果たした役割はどんなに評価しても評価しすぎることはない。トゥルベツコイは年下の友人への賛嘆を隠さず、ほかの誰よりも信頼を寄せ、全ての計画を分かち合い、ただひとりヤーコブソンだけを対等な者として扱った。(Liberman 1991: 306-307)

が、ただ一点、この引用文を読んでいて気になるのは、「亡命」という言葉が二人に等しく使われている点である。くどいようだが、ヤーコブソンは正式出国したソ連市民であり、そのためもあって「ソ連のスパイ」呼ばわりされたのだから。

先ほどドゥルノヴォについて、帰国後の1933年に秘密警察《ゲーペーウー》の尋問を受けたと述べたが、結局彼は、1937年に所謂《スラヴィスト事件》の首謀者として——トゥルベツコイとヤーコブソンが指導者であった国際的な反ソ・反革命・ファシスト集団《ロシア国民党》のスパイとして——処刑される (佐藤 2005: 8)。ドゥルノヴォが所持していたトゥルベツコイの学術論文や、図2の写真が証拠とされた (Toman 1994: 79)。もちろん知識人を抹殺するために捏造された事件であったが、それにしても、革命芸術の紹介者でありソ連側のスパイであったはずのヤーコブソンが、十数年後には反ソ的・反革命的活動の指導者に変身を遂げていたのだから驚く。しかし、実際にヤーコブソンのスタンスがそこまで大きく変わったはずはない。保守的なユーラシア主義者であるトゥルベツコイと並んで撮った写真が1926年に撮影されており、共産主義を信奉するアヴァンギャルディスト二人と一緒に撮った写真が1933年のものである事実からも、そう推測して差し支えないのではないか。

小論においては、マサリク大統領の手篤い援助策のお陰で同化を強いられることなく、その独立性を維持できた戦間期チェコの亡命ロシア文化においてさえ、亡命ロシ

ア社会が閉じられたものではなく、チェコ国内で共生する他の文化の代表者たちと——ここでは亡命を余儀なくされたわけではなく、正式に出国したロシア国民たちとも無関係ではなかったという意外に等閑視されている事実を踏まえ、ヤーコブソンとトゥルベツコイの論文、エッセイ、書簡を辿ることを通じて、プラハ学派に亡命ロシア文化の与えた影響を再確認することがまずは目指される。その上で、同じくヤーコブソンと親しく交わったアヴァンギャルディスト、タイゲにも注目し、ヤーコブソンを中心軸に政治、芸術の両面において左翼的であったタイゲから保守的であったトゥルベツコイに至るまで、ヤーコブソンというたった一人の人物の交友関係を手がかりにするだけに過ぎぬが、ともかくもプラハ学派の生まれた文化的コンテクストをいささかなりとも左右に押し広げてみたい。この目標は、相対的に自律ないし孤立していたと見なされてきた戦間期チェコの亡命ロシア文化でさえ、同時代のチェコ文化とも無関係ではなく、それなりの影響を受けていた可能性を示唆することにもなるであろう。

2 エレンブルクの『それでも地球は回る』をめぐる

それでは、貴族出身で保守的な芸術趣味の持ち主であったトゥルベツコイは、アヴァンギャルド芸術をどのように見ていたのだろうか。幸いなことに、トゥルベツコイのアヴァンギャルド観を直接伝えてくれる書簡が一通残されている。ユーラシア主義の同志ピョートル・スフチンスキイに宛てた1922年8月9日付けの手紙で、ここでは、予想通りとでも言おうか、アヴァンギャルド芸術（とりわけ国際構成主義）を賞揚したエレンブルクの著書『それでも地球は回る』が、「忌まわしく、汚らわしい著作、全編これ勝ち誇ったユダヤ人の凱歌だ」(Trubeckoj 2008: 29)と酷評されている。西欧人のエゴセントリズムとロマンス・ゲルマン文化を徹底的に批判したトゥルベツコイにとって、アヴァンギャルド芸術は、西欧文化に追随する者が否応なくたどり着く袋小路以外の何ものでもなかった。アヴァンギャルド芸術を十把一絡げにして、「未来主義」と呼んで片付けているのは音韻論の確立者とも思えぬ無頓着さだが、「読後、未来主義の本質と起因がまさに機械的・セメント的・石油的な現代ヨーロッパの賞揚にあるのだ […]」という揺るぎない確信を抱いた」(Trubeckoj 2008: 31)というように、彼にとってアヴァンギャルド芸術の潮流はどれも似たりよったりであり、彼の否定する産業化以後の西欧文化と不可分の関係にあったらしい。こうした結びつきは、チェコにおいて構成主義建築の理論家として知られたタイゲの「構成主義とはモダンなものすべての本質的特徴であり、技術的、工業的建設だけでなく、モダンな芸術においても我々は構成主義と出会う」(Teige 1923/24: 19)という言葉からも（そのことを肯定する逆方向からの光によって）浮かび上がってくる。『それでも地球は回る』の「構成」と題された章においても、エレンブルクは構成主義のもつ国際的な性

格を次のように賛美している。

注目！とびきり大切な、たぶん最重要の章。ここに新しい芸術の躰がある。近年、誰もみなひとつのことを理解した。多くの人々が、この「ひとつ」を簡潔かつ明瞭に述べた。互いに談合することもなしに。にもかかわらず、さまざまな国で同じスローガンが叫ばれたのだ。フランスの雑誌『エスプリ・ヌーヴォ』(欧州最良の雑誌)：創刊号の綱領的論説の中で「新しい精神、それは構成の精神である」と。オランダの雑誌『デ・スタイル』：「新たな集団的スタイルは構成的原理よりきたるべし」と。ロシアの雑誌『ウノヴィス』：「基礎は構成である」等々。(Erenburg 1922: 55-56)

構成主義に代表されるアヴァンギャルド芸術の国際性もまた、トゥルベツコイにとっては同時代の西欧文明の反映、西欧的エゴセントリズムの帰結であり、要するに否定的な特徴にほかならなかった。少なくとも、文化、芸術のグローバル化を肯定していたカレル・タイゲと真っ向から対立する見解に立っていたことは、以下の「バベルの塔と言語の混合」(1923)の一節にも明らかだ。

民族文化の多様性を抹消し、全人類共通の統一された文化を創設せんと欲するは、実際、いつも罪深い。この欲求は、聖書に描かれているバベルの塔建設に先立つ人類の状況の再現へとつながってゆくのであり、この状態はバベルの塔建設の新たな試みを招来しないではない。あらゆるインターナショナルが罪深く反宗教的で傲慢な精神に満ちているのは偶然でなく、その本質にかかわる。ここにこそ現代ヨーロッパ文明最大の罪悪、根本的な罪が胚胎する。(Trubeckoj 1923: 113)

上述の通り、トゥルベツコイはアヴァンギャルド芸術と産業化した西欧文明とを直結させていた。世界を制覇しようと企んでいると彼の批判する西欧文明——ピョートル大帝以降のロシア・エリート層が自ら望んでその支配下に入ろうとした西欧文明——の本質は、「ロマンス・ゲルマン文化が人類共通の文明にならんと欲して以来この文明では、物質面にかかわる技術、合理的純粋科学、そして利己的・実用的世界観が全てを圧する決定的重要性を獲得する」(Trubeckoj 1923: 113-114)というように、実用的・科学的・合理的世界観にあるとされた。トゥルベツコイの力説するところによれば、よしんば世界的・国際的文化が存在しうるとしても、それは全人類に共通する特徴だけを反映した文化——各民族固有の美学と倫理を犠牲にし、論理と科学技術だけに依拠する文化に、「精神の荒廃」を生み出す文化にならざるを得ないのだという。

他方、構成主義建築の理論家として国際的に知られるようになるタイゲが初めてロシア構成主義に言及したのは、ほかならぬ『それでも地球は回る』の書評においてで

あり、同書の影響は、タイゲの論文の中でもっとも有名な「構成主義と《芸術》の清算」(1925)にも顕著だ⁴。その論文のタイゲもまた、「機械が完全で、完全なるが故に美しいのは、絶対的な実用性が構成者の唯一の関心である場合に限る」(Teige 1966: 141)というふうに、トゥルベツコイとは対照的に、機械の美をモダンな美として、それも意図せざる機能美として賞揚しているのである。

「構成主義と《芸術》の清算」を改稿した論文「構成主義の理論に寄せて」(1928)ともなると、まず冒頭で「国際的・普遍的運動としての構成主義は一時的な流行ではない」(Teige 1966: 360)と力説するかたわら、「弁証法的唯物論の歴史観に依拠する構成主義は、生産および社会体制の変化に伴って、『芸術』という名の下に隠されているものも本質的な変化を蒙ったことを認識している」(Teige 1966: 360)とマルクス主義的な表現が前景化してくる。これもまたトゥルベツコイには容認しがたい見解であったことは、たとえばH. G. ウェルズの『影のなかのロシア』のロシア語訳に寄せた序文からも——ロシア革命批判が、ユーラシア主義的な視点に立った西欧文化批判に基づいている序文からも明らかだ。

[ロシア革命の指導者たちは]依然としてヨーロッパ的な先入観にとらわれたまま、進化論・進歩思想に——要するにロマンス・ゲルマンの自己中心主義の所産にまるまる依拠したままなのである。彼らは社会主義者だが、社会主義、共産主義とはヨーロッパ文明の嫡子にはほかならない。[...] 共産主義国家は、ロマンス・ゲルマン的国家体制があらわになった形、その完成形なのである。(Jakobson 2004: 15)⁵

3 トウルベツコイの反ユダヤ主義

とはいえ、こうして前衛芸術批判が持論のヨーロッパ文化批判へと拡大されたのはともかく、「全編これ勝ち誇ったユダヤ人の凱歌だ」(Trubeckoj 2008: 29)と批判の矛先がユダヤ人にまで向けられるのは、いささか思いがけない展開と言えよう。

正真正銘のユダヤ人であるエレンブルクは、背中を押して他者を奈落へと陥れようとする。なぜなら今、彼らユダヤ人たちは破壊への渴望に突き動かされているからだ。自分たちの文化的不毛を痛感するあまり、異教徒をねたみ、自分たちの持たぬ芸術、科学、国家、文化が異民族の手中にあることが許し難いからである。(Trubeckoj 2008: 28)

そして、最後にトゥルベツコイのたどり着くのが、「考えれば考えるほど、未来主義とユダヤ人ボルシェヴィキとのつながりが単なる偶然ではないという確信が深まる」(Trubeckoj 2007: 29)という結論とあっては、驚きを禁じ得ない。「ユダヤ人のボ

ルシェヴィキ」とは、プラハ移住直後の盟友ヤーコブソンの背後で囁かれた陰口ではないか。

一方タイゲとはといえば、トゥルベツコイの批判するグローバル化、コスモポリタニズムを肯定する立場から、国際的な芸術を牽引する民族としてユダヤ人を高く評価していた。

鉄道と飛行機と船舶は国際語の文法を、国際都市のジャルゴンを創り出す。[...] こうした状況下、文学がますますコスモポリタンになってゆくのは当然のことだ。マルクスがすでに予見していた通り、個々の民族文学にかわって世界文学が登場する。前衛的な芸術誌は国際的、多言語的だ。国際的な芸術が生まれつつある。そこで大きな役割を演じているのが、コスモポリタンな心性をもつスラヴ人とユダヤ人であるのは当然といえる。(Teige 1930: 96)

このように芸術観を比較する限り、たとえ共通の友人であるヤーコブソンがタイゲとトゥルベツコイを引き合わせたとしても、まずもって二人が意気投合することはなかっただろう。人間関係と思想信条、芸術的趣味は別物だとしても、ヤーコブソンの二人の親友の間の懸隔はあまりにも大きい。ただし、トゥルベツコイのスフチンスキイ宛書簡の激烈な調子は、親しい相手をわざと挑発するため、半ば演じられたものと読むべきなのだろう。実際、トゥルベツコイは、ヤーコブソン宛の手紙で、ユーラシア主義に特徴的な逆説の一例として、ほかでもないスフチンスキイ——敬虔な正教徒にして未来派の信奉者であるスフチンスキイ——を挙げていた(Jakobson 2004: 22)。

反ユダヤ主義にしても額面通りに受け取る必要はなからう。ナチスの人種主義を辛辣に批判した1935年の評論「人種主義について」を持ち出すまでもない⁶。1920年に刊行された最初の著書『ヨーロッパと人類』について語ったヤーコブソン宛書簡(1921年3月7日付)に「すべての民族は等しい価値を持ち、民族に上下などないことを理解してもらうこと以上のことを読者には求めない」(Jakobson 2004: 13)と書き記していたのだから。

とはいえ、トゥルベツコイがアヴァンギャルド芸術を好まなかったことは否定しようのない事実である。セム型の心理タイプについての基本的な考え方も、ある程度までは手紙に書いてある通り、自分自身が属するとトゥルベツコイの考えるトゥラン型心理タイプの対極にあると見なしていたことは、1925年初出の論文「ロシア文化におけるトゥラン的要素について」に明らかだ。トゥルベツコイに言わせれば、チュルクとセムの「両者ほど相異なり、真っ向から対立するプシュケーを見出すことは難しい」(Trubeckoj 1923: 433)。しかし、チュルク型プシュケーとセム型プシュケーの対立関係は、トゥルベツコイが全否定するロマンス・ゲルマン型とは異なり、互いに惹か

れ合う関係にあるのだという。

矛盾を探し、矛盾を見出し、矛盾を決疑論的に克服することに格別のよこびを見いだし、錯綜したディテールのなかで動くことを好むセム族と、内的矛盾のもたらす居心地の悪さを何よりも嫌悪し、その矛盾の克服について無力なチュルク族の特質は、互いに似ても似つかぬのみならず、真っ向から対立する。しかし、この対立にこそ互いに惹かれ合う理由もある。セムはチュルクにはできない仕事をしてやる——彼らに代わって矛盾を克服してやり、矛盾から解放された解決を（よしんば決疑論的なものであれ）差し出す。安定した平衡状態を得るのに不可欠な基盤を求める時、チュルク族はいつもセムの精神の創造物を選ぶのである。(Trubeckoj 1923: 43)

ボリス・ガスパロフが、この記述を踏まえ、ユダヤ人とユーラシアの諸民族が単なる対立関係ではなく相補的な関係になりうる、とトゥルベツコイは考えていたと強調している事実は、二人の言語学者の関係を考える上で多くの示唆を与えてくれる。

トゥルベツコイによれば、セム型タイプは、そのあらわれのすべてにおいて、ユーラシア文化類型の対極にある。しかし彼の態度は、やはりユーラシア的精神の対極にあるロマンス・ゲルマン的文化世界に対する場合とはまったく異なる。[...] セム型に関しては、それがユーラシア的伝統の対極なるが故のオルタナティヴであり、互惠性の原理に基づいて行動することが可能なのだという。そうした行動の結果、各々の文化の一面性への固着を避けるために必要な刺激にお互い同士なりうるのである。(Gasparov 1987: 61)

トゥルベツコイが、ヤーコブソンとの性格や生き立ちのちがいでだけでなく、思考法や創造上の潜在能力の向かう方向の相違を感じていたことは、ヤーコブソン宛の書簡のそこかしこに読みとれる。両者の研究の方向性のちがいは、ガスパロフが指摘する次の点にも端的にあらわれている。

ユーラシア言語連合に関する論考においてもヤーコブソンは彼のいつものアプローチ法に忠実だ。ユーラシア陸塊の境界領域に——すなわち西方のバルト諸国、西スラヴ、ルーマニア、東方では日本に——その注意を集中する。相異なるシステムに属する特徴が衝突したり組み合わせざったりしている状態にある、そんな周縁にヤーコブソンの関心は向かう。一方トゥルベツコイにとって、ユーラシア的現象を把握するのに最良の方法は、ユーラシアの内陸にその起源を有し、ユーラシアに一般的な特徴をもっとも明瞭に示す中心領域（トゥラン語族の居住域）に着目することなのである。(Gasparov

1987: 66)

千野栄一は、トゥルベツコイとヤーコブソンの二人を、プラハ言語学サークルにおいて言語の構造の面を強く主張した立場を代表する研究者と見なしていた（亀井・河野・千野 1996: 1161）。戦後、プラハ学派の「使徒」ともいえる存在になったヨゼフ・ヴァヘクも、機能的側面に注目したマテジウスら《チェコ派》に対して、「《ロシア派》の研究は言語の機能的側面を看過しなかったものの、言語の構造的な構成により重点を置いていた」（ヴァヘク 1999: 427）と両派のスタンスの相違を強調している。しかし、そんな二人の《ロシア派》、《構造派》の間にも研究法に相違があったとするガスパロフの指摘は興味深く、しかも具体的で説得力がある。構造を抽出しようとする場合にも、トゥルベツコイは中心領域にある典型例からシステムを組み立てていったのに対し、ヤーコブソンは当該システムが、それとまったく異なるシステムと衝突し、二つのシステムの対比があらわになっている周縁に注目することによって対象の構造の輪郭をつかみ出そうとしたというガスパロフの議論は、「今日のプラハ学派の信奉者たちは、言語がそのより高次のレベルにおいても平衡に達することのないという事実を追求し、一般に各々の言語レベルにおいて構造的な法則性が明確に一貫して適用される中心的領域とそのような明確さと一貫性が著しく減少する周縁的領域を措定することができるという結論に達しつつある」（ヴァヘク 1999: 432）との見解を考え合わせるなら、なおのこと興味深い。だがその反面において、「言語がそのより高次のレベルにおいても平衡状態に達することがないという事実」を謙虚に受け入れ、目的論に拘泥しなかったのがむしろトゥルベツコイの方であったという事実も、一つの逆説ではないだろうか。

4 ヤーコブソンにおける機能主義の萌芽とタイゲの構成主義的言語論

それでは、相容れない芸術的趣味をもつタイゲとトゥルベツコイの言語観はどう異なっていたのだろうか。タイゲに言語学についての専門的知識はなかったが、フォルマリズムの詩的言語論の影響を受けた「ことば、ことば、ことば」（1926）という論考をものしており、ある程度手がかりを与えてくれる。この論文はヤーコブソンのエッセイ「詩における美術工芸、手工芸の終焉」（1925）の色濃い影響のもとに書かれたとされている。確かに、前者の論旨において後者からの引用が大きな役割を演じているのは事実だ（Teige 1930: 102）。

ヤーコブソンのエッセイは、左翼系雑誌『ヘッドライト』にクイズのコーナーを設けてはどうかという提案があった時、編集長をつとめていた詩人 S.K. ノイマンがクイズ欄というアイディア自体は悪くないが、その回答がプロレタリアに必要な真実を示してくれるように工夫されねばならない、と大真面目に返答したことを揶揄したも

のだ。言語学と詩学の専門家ヤーコブソンにとって、曖昧性を最小限にとどめ、明晰であるべき政治論文を押韻された謎々に——両義性、曖昧性を利用した謎々に書き換えようとするのは、対象指示（伝達）を目的とする実用言語と、表現自体を志向する詩的言語の差異をわきまえぬ愚行でしかなかった。

それは、万国のプロレタリアートについての標語の入った謎々を印刷しようと思案にふける彼にそっくりだ。プロレタリアのクロスワードパズルをまとめ上げようとしたり、共産党機関紙の社説をマイルドな抒情詩に変形しながら、満ち足りた様子で花を象った装飾のあるカップからラム入り珈琲を飲んだり、熟練の手仕事で「労働を讃えよ」と刺繍されたクッションに顔を埋め、幸せにまどろんだりする彼に。(Jakobson 1995: 563)

この一節は、純粋に伝達機能だけを考慮して書かれるべき政治論を言葉遊び的なクロスワードパズルやもっぱら詩的機能を果たすべき韻文へと書き換えることが、芸術気どりの装飾がほどこされて使い勝手の悪い工芸品のようなもの——芸術と実用のヌエ的存在として美術工芸品に似た試みであることを当てこすっている。

トマンはヤーコブソンのこのエッセイを、プラハ言語学サークルの正式発足（1926年3月）以前の萌芽状態にある機能構造言語学を伝える記録としても、また機能言語学とアヴァンギャルド芸術における機能主義の流れとの緊密な結びつきを証拠立てる論文としても重視しているが、この評価には同意しかねる。確かにヤーコブソンがこのエッセイでまず、言語の多機能性というボードゥアン・ド・クルトネからプラハ学派が引き継いだとされる考え方を打ち出しているのは事実である。タイゲが「ことば、ことば、ことば」に引用しているのもこの一節だ。

言語一般なる概念は虚構である。ブラックジャック、ポーカー、トランプで家を作る遊び等々のすべてに等しく適用可能な一般規則など存在しないとまったく同じで、言語法則も、ある特定の課題によって規定されたある特定の体系に関してのみ定立できるにすぎない。(Jakobson 1995: 563)

しかし、ここでの見解は、後年の「言語学と詩学」（1960）のように《ドミナント》の概念と組み合わせられた上で、言語や詩テキストにおける複数の機能の共存が主張されているわけではない。1925年のエッセイにおける言語機能論は、言語の実用機能と詩的「機能」の対立についてさえ語ることなく、あくまでも初期フォルマリズムの詩的「言語」論の枠内にとどまっている。「詩における美術工芸、手工芸の終焉」では、言語の諸機能がそれぞれ独自の言語体系と一対一で対応するかのようによめて

しまうのである。要するに、1925年の時点でのヤーコブソンの考えは、プラハ学派の機能主義よりは、むしろ当時デザインや建築の分野で有力だった機能主義に近く、「単一機能主義」とでも呼ぶべきものだ。「詩における美術工芸、手工芸の終焉」における機能の概念そのものも、その純粹志向のゆえに建築における機能主義に似かよっていることは、次の一節にもうかがえよう。

発話の対象を志向する伝達の言語と表現そのものを志向する詩的言語は、二つの異なる（多くの面で相対立する）言語体系をなしている。そして、私たちが欲するのは構成的なもの、それらの目的に合致したもののなのだから、花を象ったランプシェードに嫌悪を覚える。まさに同じ理由で、プロレタリアートにとって有益な真実を謎々や押韻詩で表現したいとはつゆほども望まない。「有益な真実」の伝達は、まったく異なった様態の表現を要請する。(Jakobson 1995: 563)

そもそも美術工芸、手工芸を批判するというヤーコブソンの趣向自体が、たとえば1924年に発表されたタイゲの論文「美術工芸と工業的芸術」を踏まえていると、むしろタイゲの主張をヤーコブソンが繰り返していると解釈できなくもない。すでに「美術工芸と工業的芸術」(1924)においてタイゲは、芸術の自律性、純粹性と合目的の実用性とを峻別すべきだとの見地から、美術工芸が純粹な実用を徹する訳でも、純粹な芸術を目指す訳でもない中途半端な折衷的・妥協的産物であるが故に手厳しく批判していた。次の引用文には、ティーカップへの言及さえあるではないか。

現代人にとっては、仕事（すなわち具体的課題の遂行）と[……]踊りの美しさと真実であるところの芸術が存在している。[……]ティーカップが絵や彫刻の芸術的顕現と同じ価値を持ちうると美術工芸家が考えるのに対して、現代人は食器と舞踊、仕事と詩を正しく区別する。今日、美術工芸は仕事と詩の妥協的産物である。装飾的芸術である。しかし、妥協は芸術ではない。(Teige 1927: 82-83)

タイゲの工芸批判の前提にあるのは、表裏一体になった二つの純粹主義であり、イデオロギー性、物語性から解放された純粹なポエジーとしての芸術しか認めぬ一方で、実用的な事物に装飾という形で芸術趣味が入り込むのを拒む機能主義建築論に由来する立場と峻別されつつも共存するのである。ヤーコブソンからタイゲへの一方的影響というトマンの説よりは相互影響の可能性を指摘したいところだが、少なくともヤーコブソンとタイゲのエッセイとに単一機能主義と、その帰結としての二つの純粹主義が共通していることにまちがいない。

他方、「ことば、ことば、ことば」におけるタイゲの言語論とヤーコブソンの詩的

言語論との間に相違点が目につくのもまた、事実である。たとえば、タイゲが力を込めて論じている「世界言語」は、フレーブニコフが構想し、ヤーコブソンが『最新ロシア詩』で分析した「世界共通のザウミ言語」とは全く異なる普遍言語——「交通手段の発達と市場のグローバル化によって、言語も国際化する。スピード時代に言語は最小努力の最大効果を目指す。言語も単純化へ向かう。[...] 当然の流れとして、普遍的な世界語のようなものが生まれるだろう」(Teige 1930: 97) というように、実用的機能に局限された相互理解のための普遍言語であり、いかにも構成主義者が夢見るにふさわしい世界語なのだ。

さらにその先でタイゲが「国際的な伝達が可能になることは、バベルの塔以来の言語的混乱という問題を合目的的に解決するため、必要不可欠なのである」(Teige 1930: 98-99) と、バベルの塔に言及していることも目を惹く。なぜならトゥルベツコイの言語学プロパーではない言語論が——言ってみればユーラシア主義的言語文化論の中でもっとも重要な論考が——「バベルの塔と言語の混合」(1923) と題されており、タイゲとトゥルベツコイの言語観の相違をも浮き彫りにしてくれるからである。バベルの塔の伝説に関するタイゲとトゥルベツコイの立場の決定的なちがいは、前者がバベルの塔がもたらしたとされる言語的混乱を否定的に捉えるのに対して、後者が言語的混乱を肯定的に考えている点にある。タイゲの夢見る人工的普遍言語や視覚言語であれ、比較言語学者が想定する印欧祖語であれ、あるいはマール主義が先史時代とマルクス主義の未来の両方に想定する唯一無二の言語であれ、トゥルベツコイは統一的で等質的な言語を非現実的なものとして認めない。

現在多くの印欧語と印欧民族が存在するが、歴史的な過去を振り返っても、私たちの目の届く限り、数世紀の時を遡ったところで、以前も同様だったことに気づく。現代の印欧諸語の先祖以外に、遠い昔にはすでに死滅してしまっ、その子孫を残していない印欧諸語が数多く存在していた。限りなく遠い時代に所謂「印欧祖語」が——その言語から歴史によって証明されている言語がすべて発達してきたとされる唯一無二の印欧語が——存在していたと考えられているが、しかしこの推定は何世紀遡ったところで多くの印欧諸語が見いだされるという事実と反する。(Trubeckoj 1987: 48)

その言語観は「言語とは次第に気づかぬまま移り変わっていく方言からなる切れ目のない連鎖」(Trubeckoj 1923: 115) というイメージに反映されている。さらに「民族文化と言語の多様性は分化の結果である。分化の法則の作用は言語の分野にもっとも鮮明に見てとれる」(Trubeckoj 1923: 114) と、ユーラシア主義的な文化相対主義とも結びつき、最終的には「民族的な多様性を抹消せんという国際主義やヨーロッパ化の試みは、文化の貧困化を招く」(Trubeckoj 1923: 108) という主張にまでつながってゆ

く。

5 トゥルベツコイとヤーコブソンの言語連合

トゥルベツコイの言語学上の業績においてユーラシア主義と直接関係しているものといえば、《言語連合》の概念を提案したことがまず念頭に浮かぶ。この用語・概念についての『三省堂言語学事典』の解説をまず読んでいただきたい。

ある地理的に連続した地域で、同系関係に基づかない一連の言語特徴を共有するような言語群のことをいう。トゥルベツコイが第1回国際言語学会議（1928）に出した「提案」の中で初めて用いた用語で、それによれば「統語面における大きな類似、形態構造の基本原理における類似、および多くの共通な文化語彙、またしばしば、音韻体系における外面的な類似性を示すけれども、組織的な音韻対応、形態素の音形に関する一致、並びに共通の基礎語彙がまったく見られないような言語のグループ」と定義され、同系関係に基づく「語族」という概念とは厳密に区別すべきものとされた。（亀井・河野・千野 1996: 500）

言語連合が純粋に言語学上の概念であると同時に、言語および文化の収束というコンセプトによってユーラシア主義と密接に結びついていたことは間違いない（Toman 1994: 121-122）。それは、「言語連合」なる用語が言語学会議への提案よりも前に雑誌『ユーラシア時報』に発表された論文「バベルの塔と言語の混合」ですでに提起されていたという事実が雄弁に物語りもいる。

同じ地理的、文化歴史的な地域にあるいくつかの言語同士が特別な類似を見いだすことが、それもこの類似が共通の源に起因するのではなく、長期にわたる隣接と並行的な発達によってもたらされたものである場合がある。発生論的基盤に依拠していないこのような言語群のために、我々は「言語連合」という呼称を提案する。（Trubeckoj 1923: 116）

表面的には、言語・方言の多様性というトゥルベツコイの言語観の根幹にある理念に反するとも思える収束的発達への着目であるが、彼がこの概念を提起したのは、分岐的発達や語族といった比較言語学に伝統的な概念を補足し、複数の言語が共存する現状や諸言語の歴史をより正しく説明するためであった。《収束／言語連合》が《分岐／語族》と互恵的で相補的な関係にあるべきだとするトゥルベツコイの基本理念は、プラハ学派が1929年の第一回国際スラヴィスト会議に提出したテーゼにおいて、おそらくはヤーコブソンが起草したと推測される下記の項目にあらわれた見解——両

者を対立的に捉えるばかりか、取東・言語連合の方を重んじるかなり極端な見方——とはずいぶん違う。

史的言語学をそのうちに含む、発達を扱う諸言語において、諸事実が——たとえそれが絶対的な法則性をもって実現されたとしても——恣意的で偶然的な所産であるとする考えは、今日では発達する諸事実の法則にしたがって連関するという考え（定向進化説）に、一步を譲ったと見られる。文法のおよび音韻論的な諸変化の説明に際して、取東的発達の理論が、機械的かつ偶然的な分岐という考えを背景に押しやったのが認められるのも、この故である。（「テーゼ」：354）

言語連合の概念を提唱した時、すでにトゥルベツコイが言語史の説明に語族の概念と言語連合の概念の両方が必要だと考えていたことは、先に引用した「バベルの塔と言語の混合」において言語連合を定義した後、文章が「こうした《言語連合》は、個々の言語の間だけでなく、語族同士にも存在する。すなわち、発生の論的に同系ではないが、同一の地理圏、文化歴史圏に位置する幾つかの語族が相寄り、一連の共通した特徴によって《語族連合》を形成するのである」と続くことから了解してもらえるだろう（Trubeckoj 1923: 116）。1936年12月に行われた報告に基づく論文「印欧問題についての考え」ともなると、さらに明確に「このように語族は、あるいは純然たる分岐的発達の所産であることも、あるいは純然たる取東的発達の所産であることも、さらには両者のタイプの発達がさまざまな比率で結合した結果でもあり得る」（Trubeckoj 1987: 47）と「同系関係に基づく『語族』という概念とは厳密に区別すべきもの」（Trubeckoj 1987: 30）とした彼自身の「提案」（1928）を否定するかのようになり、言語学において一般的、伝統的な語族の概念が純然たる分岐的発達のみを前提としている一面性を批判しながらも、分岐的発達を取東的発達に劣らず重視している。

それでは、ヤーコブソンの言語連合に関する考えは、トゥルベツコイとどう異なっているのか。今では言語連合論の古典とされている「ユーラシア言語連合の性格に寄せて」（1931）を取りあげることになろう。これはヤーコブソンが正面きってユーラシアを論じた唯一のモノグラフだが、気候と地質に基づいてユーラシアがヨーロッパからもアジアからも区別されることを——すなわちユーラシアの一体性を主張するサヴィツキイの議論に触発されたのであろうか、同様の境界が言語面でも画定可能であるとの仮説に依拠していることがまず目を惹く。そうした仮説は、新奇さを好み、旧来の学説を否定することに情熱を傾けたヤーコブソンにとって心惹かれるものであったにちがいない。その結果、この野心的な論文は斬新さによって読者を打つ一方で、ユーラシア主義の思想への共感とはほとんど無関係に、純粋な知的好奇心に突き動かされているかのような印象を与える。にもかかわらず、主張そのものは、モダニスト

のタイゲと親交が深かったヤーコブソンの言語連合論の方が、トゥルベツコイの言語連合論よりもはるかにユーラシア主義的だという逆説的な様相を呈している。

ヤーコブソンとトゥルベツコイの言語連合についての考え方の相違は、「ユーラシア言語連合の性格に寄せて」に示したサヴィツキイとトゥルベツコイの反応のちがいに反映されている。サヴィツキイは、「ヤーコブソンの発見は文化全般に関するユーラシア世界の性質を理解するにあたって絶大なる意義を有している！」(Savickij 1931: 2)と手放しに絶賛した。

この書簡においてサヴィツキイが熱狂的にその感想を語っているのは […] ヤーコブソンの論文「ユーラシア言語連合の性格に寄せて」についてである。ヤーコブソンに、政治的な動機があったとは考えにくい。ユーラシア言語連合に対する彼の関心は、学際的研究によって当時一般的だった歴史言語学の諸概念に代わるものを見いだすことにあったのだろうが、 […] サヴィツキイは、ヤーコブソンの探求を熱狂的に受け入れ、早速ユーラシア主義者たちに喧伝した。(Toman 1994: 122-123)

サヴィツキイの熱狂は、ヤーコブソンの論文の公刊に先立ち、言語学についての専門知識のない人々のために、自身による要約と解説をまとめた小冊子を公刊したほどであった。解説文の一部を訳出してみよう。

ロシア=ユーラシアの性格についての新しい側面を照射する「大発見についての告知」と、私はヤーコブソンの報告を評価する。ヤーコブソンのデータはユーラシア言語連合の存在を確認する。これに先立つ出版物においてユーラシア主義者たちはロシア=ユーラシアの自然を、地理的、歴史的に独自の世界として研究してきた。ヤーコブソンの論考は、ロシア=ユーラシアが言語的にも独自の世界であるとの主張を可能にする。 […] その結論によれば、地理面でのユーラシア世界とほとんど重なるユーラシア言語連合を特徴づけるのは、語義の弁別のために子音の硬軟の区別が利用されていることなのだという。(Savickij 1931: 1-2)

他方、トゥルベツコイからの礼状は「論文ありがとうございます。大いなる興味と満足をもって拝読しました。素晴らしい論文です。コメントを書き加えた原稿を返送します。私の記憶では、ラップ語(サーミ語)には音色による相関関係はなかったはずです」(Jakobson 2004: 164)と書き起こされている。「素晴らしい」と賞賛し、「満足を覚えた」と述べてはいるものの、ラップ語についてのみならず、数多くの事実関係の修正がここでは提案されている。何より、ユーラシア言語連合を規定する特徴の一つであり、しかもポジティブな特徴としてサヴィツキイが重視した硬子音と軟子音の

対立について、「実際『硬軟』の対立と孤立的な硬口蓋音の間に境界を引くことはひじょうに困難です。多くの言語において『硬軟』は『歯音』にしか存在しておらず、実質的に『軟らかい方の歯音』は硬口蓋音として実現されています」(Jakobson 2004: 165)と、それが相関関係をなすか否かの判断の難しさを指摘しているあたりに、トゥルベツコイの慎重な姿勢がうかがえる。

サヴィツキイが「我々の時代の研究生活に固有の特徴は、一つの研究対象に対する様々な分野の代表者たちの仕事の計画的に組織された統合である。まさにこのような統合を実現しているのが学問的实践におけるユーラシア主義だ」⁷と力説し、「ユーラシア言語連合に対する彼の関心は、学際的研究によって当時一般的だった歴史言語学の諸概念に代わるものを見いだすことにあった」(Toman 1994: 122)とトマンも指摘している学際性についても、トゥルベツコイは懐疑的であった。1929年5月1日付ヤーコブソン宛書簡を読んでいただきたい。

現今のロシア言語学において《構造》言語学が支配的とはとうてい言い難く、このような《文化史的》傾向が存在していることは、遺憾ながら認めざるを得ない。たとえばヤコヴレフは、文化史の「誘惑」に溺れており、恐らくは、時間と共に彼の中で構造主義的傾向ではなく、文化史的傾向が勝ち勝ることになるのだろう」(Jakobson 2004: 131)

晩年の論文「印欧問題についての考え」(1936)においても、「印欧祖民族とは印欧語族に属する言語を母語とする人々の謂である。学問的見地に立って、ここから導き出せる唯一可能な定義は、《印欧人》が、《統語論》や《生格》あるいは《アクセント》と同様、純粋に言語学的な概念ということだ」と、劈頭から述べられている(Trubeckoj 1987: 44)。そして、印欧祖民族が純粋に言語学的存在であって、実際にそのような民族が存在したとは考え難いという事実を忘れて、ドイツの比較言語学者たちは、先史考古学や人類学、民族誌学を援用しつつ、どのタイプの陶器が印欧祖民族のものであるかを問題にしている、と安易な学際的研究を痛烈に批判している(Trubeckoj 1987:48-49)。

先述の通り、ヤーコブソンの論文は言語連合論の古典と認められており、その評価に門外漢の筆者が異を唱えるつもりはない。しかし、トゥルベツコイにあっては、言語連合はあくまでも言語史のより正しい理解のために要請された概念であった。言語連合の概念の扱いにあらわれている伝統的な比較言語学に対する姿勢、そして言語連合とユーラシア主義との関連づけの仕方という二点についての見解の相違は、微妙ではあるが、無視するには大き過ぎる。そして、次に引用するサヴィツキイの評言は、これら二つの問題がヤーコブソンの言語論に目立つ目的論的傾向と結びついているこ

とを「同志的」とでも形容すべき立場からの確に捉えており、言語連合論が目的論をめぐる問題とも無縁ではないことを示唆している。

ヤーコブソンの学問的業績には世界を目的論的に解釈せんと情熱が横溢している。「現今の価値の階層関係において『いずこへ』という問いは『いずこより』という問いよりも高く評価される。発生論的な指標にかわって自己規定が民族の特徴となり、階級の理念がカーストの理念に取って代わった。社会生活においても、学問的組み立てにおいても、発生の共通性は機能の共通性のために影が薄くなり、合目的性の統一を前にして色あせてきた。目的——ごく最近のものであるこのスローガンは、あらゆる分野で復権を遂げつつある […] 言語の同系という伝統的な概念のかたわらに、同一の志向性を共有する諸言語という概念が明らかになりつつある」。こうした理念にしたがえば、ユーラシアの発達地に属し⁸、硬軟の子音の区別がそれなりの地位が付与されているスラヴ、ロマンス、インド、フィン・ウゴール、チュルク、モンゴル、北コーカサスといった語派はみな、その発生のちがいにもかかわらず、同一の志向性を有する言語なのである。音韻面での《志向性》の一致、共通の方向への変化こそは、ユーラシア諸言語を互いに結びつけている。(Savickij 1931: 3)

たしかにヤーコブソンの言語論・詩論には、ダーウインの主張する機械的な「自然選択」を否定する、レフ・ベルクに代表されるロシア生物学者の伝統に対する共感が底流にあるらしい(Holenstein 1976: 118)。先に引用した「テーゼ」の一節にある「発達する諸事実の法則にしたがって連関するという考え」(テーゼ: 354)とは、ベルクが1922年頃に提起した規則性に基づく《定向進化説 nomogenesis》——同一の環境にある生物は、魚と鯨のように種の違いかかわらず類似した形態変化を遂げるという説——を踏まえているのだが、言語学史上有名な「テーゼ」の一項とはいえ、その実証可能性については危うさを覚えずにはいられない。

言語の静的な構造的性、体系性を超え、言語に内在する自己組織化の能力を(特に言語発達の局面において)強調するヤーコブソンは、言語連合という現象も言語接触による相互影響の結果というよりも、それらの言語が共有する志向性の顕現と見なす。フランスのユーラシア主義研究者ラウレルが《発達地》なる概念について次のように指摘しているのを読むと、かつてトゥルベツコイがヤーコブソン宛の手紙で、「貴兄には神秘主義はお気に召さぬだろうが」(Jakobson 2004: 22)と遠慮がちに書いた事実とは裏腹に、ヤーコブソンの言語論に認められる目的論志向の方に、ユーラシア主義と共通する神秘主義的なものがより多く見いだされるように思われてくる。

発達地の概念は、ユーラシア主義者たちが思いついた地域と文化の神秘的な結びつき

が存在することを科学的に証明するために要請されたものであり、この概念は人間と自然とが目的論的な相関にあるという理念を立証しよう、自然と文化の全一性というロマン主義的な知覚を示そうとする。歴史と地域のこうした合一の結果、ユーラシア主義者たちが生命ある有機体として、集合的個我として描き出す地理の本質が生み出される。(Laruelle 2004 : 117)

トゥルベツコイの「提案」において、言語連合は語族とは「厳密に区別すべき」(Trubeckoj 1987: 30)とされるが、「実際には、それほど明確に区画できるものでなく、中心部では比較的明瞭にあらわれても周辺部でその境界はしばしば不分明である」と、さらには「言語連合的な類似性と同系関係に基づく親近性はしばしば重なり合い、見分けの困難な場合も少なくない」(亀井・河野・千野 1996: 503)と、項目「言語連合」の執筆者は批判的なコメントをつけ加えている。しかし、この種の事実については、言語学会議に提出された「提案」の5年前に発表された「バベルの塔と言語の混合」において、すでにトゥルベツコイ自身論及しているところであった。トゥルベツコイの言語事実に忠実で慎重な姿勢は、同論文のなかの「言語とは次第に気づかぬまま移り変わっていく方言からなる切れ目のない連鎖なのである」(Trubeckoj 1923: 115)という比喻や、「諸言語の歴史は分岐的発達も収束的発達も知っている。時としてこれら二種の発達の間には区別を設けることが困難なことさえある」(Trubeckoj 1987: 46)ということばにも明らかだ。

終生ヤーコブソンがこだわり続けた目的論に関しても、トゥルベツコイははるかに慎重であった。そのことをはっきり示すのが、1927年1月12日付けのヤーコブソン宛書簡である。

音声変化の発生を「目標」によって(目的論的に)説明することは、本質的に新しく重要なものを数多く開示することが出来るでしょうし、開示してくれるにちがいません。しかしそれでも、私は目的論的な説明が「発生論的」説明を完全に放逐し、無意味にするにちがいないとまでは思わないのです。言語の生においては、両方の要因が——体系の「理想的変容」へと向かう無意識の志向性と、そして体系に無秩序をもたらず「機械的原因」のために生まれる無目的な変化の両方が並行して作用しています。(Jakobson 2004: 104)

トゥルベツコイの『音韻論の原理』の再版(1958)ではじめて付録として収録された「自伝的覚え書き」の中のヤーコブソンによる加筆部分は、先の書簡を次のように解説する。

彼は、音変化の発生を目的論的に説明することによって、本質的に新しい、重要な多くの事柄が明らかに出来るし、また明らかになる筈だということを知ってはいたが、しかし、無用の音変化を体系内に混乱しか生み出さないものと見なし、それらの発生を「機械的な諸原因」のみに帰する、伝統的な見方から、彼は初めのうちなかなか抜け出せなかった。

もっとも、まもなく彼の疑いは晴れ、詩的音論綱領に関する私の提案に対して、次のように返事して来た。なお、この綱領は、1928年ハーグで開かれた第1回国際言語学会議で報告することになっており、のちに、会議の議事録に発表されたものである。

「貴兄の提案に全面的に同意します。問題の斬新さに鑑み、少々冗長になることをあえて恐れず、可能な限り明快に『噛み砕いて』論証を組み立てることが望ましいということだけは言い添えたいと思います。[...] これらの問題について何一つ聞いたことのない者の観点に立ってもらいたいのです。平均的な言語学者が旧習を墨守する愚鈍な、しかも抽象に慣れていない人々であることを思い出してほしいのです。[...] しかし、これは形式の問題に過ぎません。本質については、無条件で同意しますから、私の署名を付け加えるようお願いします」(トゥルベツコイ 1980: 338-339)⁹

確かに、1933年に発表された論文「スラヴ諸語の軟口蓋音の歴史に寄せて」の冒頭でトゥルベツコイ自身も「論文『現代音韻論と言語カテゴリーの記述』でN. ヴァン・ヴェイクは現代音韻論を批判している。音声進化の目的論的(目標志向的)性格を強調し、音変化の意義を規則的で合目的的に構築された音韻体系の創設に見る所謂《音韻論学派》とはちがって、ヴァン・ヴェイクは音声進化が原則的に無意味であることを強調する」(Trubeckoj 1987: 168)と音声変化についての伝統的な見方を批判していることから、目的論的見地をある程度受け入れたものと推察される。だからこそ、トゥルベツコイの音韻論には「通時音韻論における目的論的立場の主張に先験論への傾斜が認められることなど、当初から批判を受けた点はあった」(河野・亀井・千野 1996: 1480)のであろうし、『二十世紀の言語学』でも「マルティネは、『目的論』、『目的性』、『体系の調和への傾向』といった用語が多く、言語学者たちのあいだに根強い不満をひきおこしたと言っている」(ムーナン 1974: 126)と評されるのであろう。実際、『共時言語学』でマルティネは、初期の音韻論の目的論的傾向について———ということは、とりもなおさずトゥルベツコイとヤーコブソンの理論の目的論的傾向について次のように批判していた。

疑いもなく、調和への傾向を語ることは、説明を目的論的に展開することである。[...] 言語、あるいはその言語をしゃべる人たちに、何か、美しい、規則的な表を作りやす

くする方向に音素を選ばせる、神秘的な力などあるはずもない。むしろここでは、道具は使われていくうちに改良されていくものだ、といった理解が必要であろう。我々が「調和」という名にふさわしいと考えている現象も実は、無数の小さな「偏向」の総和にほかならない。もっとも、それらが固定される機会にめぐまれたのはその言語の良好な機能性にとってあながち有害ではないという理由があったからにほかならない。[...] ここに姿を現しているのは調和を目指す傾向というよりは、使用されている伝達手段の経済性を目指す傾向である。(マルティネ 1977: 71)

しかし、言語学にとって重要な事実として、言語には調和へ向かう傾向が（少なくとも調和に向かっているかのような様相を呈する事実が）あることはマルティネも認めていたらしい（マルティネ 1977: 70）。「目的論は言語事実の中によりは用語〔概念〕の中に潜んでいた」（マルティネ 1977: 71）とコメントする所以であろうか。ムーナンもまた、マルティネの目的論批判に同調しながらも、つねに音韻体系を回復しようとする均衡と、コミュニケーションのなかで絶えずこの均衡をおびやかすつづける諸々の力の拮抗作用についてのトゥルベツコイの見解の正当性を認めざるを得なかった（ムーナン 1974: 127）。にもかかわらず、トゥルベツコイの「自伝的覚え書き」にヤーコブソンが加筆した部分には我田引水の気味合いが筆者には感じられる。ムーナンの次の評言は、これはこれで言い過ぎの感なきにしもあらずだが、それにしても一定の真実が含まれているように思われる。

いちばん奇妙なのは、この目的論的方向付けが、ヤーコブソンの場合、その同志の場合よりもいっそう観念論的と言えそうな用語で表現されているということである。すでにきわどいものとなっている用語を持ち出すのも彼なら、[体系内における]「突然変異の機能」について語り、その「任務は均衡を再建することである」というのも彼であり、さらに、まるで言語のなかには神秘的な力がひそんでいるのだとでも言うように、「個々の音韻的突然変異の精神」について語っているのもとりわけ彼なのだ。（ムーナン 1974: 126-127）

根強い誤解をただすために《目標論 teleonomy》という用語と概念によって合目的性を《目的因》という形而上的な概念から区別しようとした生物学者 C.S. ピッテンドライの提案をヤーコブソンは歓迎した、とエルマー・ホーレンシュタインは言う（ヤーコブソン 1978: 204-205; Holenstein 1976: 118）。さらにホーレンシュタインは、《目的論》と《目標論》の相違を明瞭にするために《目標志向的 goal-intended》行動と《目標趨向的 goal-directed》行動の区別について説明する。すなわち、《目標志向的》行動が意識的な表象、確信、願望、意図を基礎にするのに対して、《目標趨向的》

行動は目標志向的な外観を呈するが、意識的に働く主体がそこには見いだされないような過程だと (Holenstein 1976:119)。さらにホーレンシュタインは言葉を継いで「言語の機能の多くは無意識的であるから […] 目標趨向的過程として説明されねばならない」 (Holenstein 1976: 119) と結論づける。

しかし、それでヤーコブソンの目的論志向から形而上的ニュアンスが払拭されたかと言えば、必ずしもそうではない。言語的過程の無意識的性格はトゥルベツコイが繰り返し強調した点ではあるが、ヤーコブソンの場合は必ずしもそうではないからだ。ピッテンドライによる《目標論 teleonomy》の提案についても、ホーレンシュタインの言うように「歓迎した」とも思えない。ピッテンドライを引用した後には、「teleonomy という語は、客観主義的な羞恥心から《終極目標》という語を避けたいと思うときに用い得る語である。しかしながら、生命ある存在物はあたかも個体の保存、特種の保存という終極目的を目指して構造化され、組織化され、条件づけられているかのようにすべてが生起する」だとか、「人間の組織体の出現を言語の出現の結果であると、生命領域を新しい王国すなわち、諸観念と意識の分野である精神領域に変えた言語の出現の結果であるとさえ解釈されている」といった引用が長々と続く (ヤーコブソン 1978: 205)。そして次のように「意図性」が強調されるにいたるのである。

目的志向性の問題が生物学では現在なお討議中であるとしても、それは、我々が人間、習俗、制度、とりわけ言語を対象とするやいなや疑い得ないものとなる。マッケイの適切な定式に従えば、言語は、人間そのものと同様、「目的論的体系、すなわち或る目標を志向する体系」である。「意図性は論理的に言語発展の原動力ではあり得ない」という時代遅れの信条は、言語と人間の意図的行動との本質そのものを歪めている。(ヤーコブソン 1978: 205)

二人のテキストを読み比べてくると、目的論志向についてもトゥルベツコイとヤーコブソンの間には差異が——少なくとも程度の差が見えてくる。体系の概念から出発して言語変化についてのより説得力のある説明であるだけに、より《目標論的 teleonomic》なトゥルベツコイの姿勢と比較する時、ヤーコブソンには《目的論的 teleological》な傾向がどうしても感じられてしまう。恐らくそれは、トゥルベツコイが《体系性》のメタファーとして有機体をイメージしつつも、スラヴ諸語に現実に生じた軟口蓋子音の変化を個々の言語の体系性に依拠した説明を可能にする、いわば説明原理としての《目標趨向性 goal-directedness》を念頭に置いているだけなのに対して、ヤーコブソンの場合は当該諸言語が共有する同一の志向性が収束的变化をもたらすと考えることによる。第4回国際言語学者会議(1936)での報告「言語の音韻論的

類縁性に寄せて」において、音韻論的類縁性の発生には接触による伝播では不十分であると、支配的な要因となるのは当該の変化への志向性だと——それぞれの言語集団が共有する内在的な傾向であると——はっきり主張されているように (Jakobson 1985: 96-97)。

ヤーコブソンについては、「実際に個別言語の研究を経てきているヤーコブソンならではのもので、実に見事な理論化を見せるが、同時に、別な角度から眺めたとき一定の無理が観察される」(河野・亀井・千野 1996: 1516) といった批判がしばしば向けられるが、言語接触の作用や伝播の可能性を低く見積もる音論的類縁性の主張からも、理論的妙味に淫しているかのようなヤーコブソン像が浮かび上がってくる。一方、トゥルベツコイの言語論にはこの種の無理がほとんど感じられない。“theoretically-orientated”な傾向が目立つヤーコブソンとあくまでも“corpus-based”な立場を護持するトゥルベツコイの相違は、トゥルベツコイ自身が語った「トゥラン的なタイプとセム的なタイプの差異」を——ガスパロフのいう互惠的で相互補完的な両者の関係象徴しているかのようなようだ。トゥルベツコイによるトゥラン型心理タイプの描写には自画像を思わせる筆致が感じられるが、論文「ロシア文化におけるトゥラン的要素について」の中ではトゥラン型心理タイプの欠点が「理論的思考に対しあまりにも意欲がなく、実際に理論的思考をしないことである」(Trubeckoj 1927: 51) と語られている。きわめて理論的性向が強いとの定評がありながらも (山口 1999: 130-131)、トゥルベツコイは自分自身を具体性志向が強く、抽象的な理論が苦手な研究者だと見なしていたのである。だからこそ、ガスパロフの指摘する通り、ヤーコブソンの純粹理論志向が大きな刺激になったのであろう。しかし、ヤーコブソンの理論志向が相互補完的な関係を破壊するほど行き過ぎたと思われた時、たとえば「形態論的变化の原因に関する貴兄の論考の記述からは、何も理解できない。またしても貴兄は、専門知識のない者のみならず、専門家でさえすぐには理解しかねるような抽象的な定式化にうつつを抜かしているのではないかと危惧しています」(Jakobson 2004: 242) というように、敢えて苦言を呈することも辞さなかった¹⁰。次に引用するのはユーラシア主義に批判的だった歴史家アレクサンドル・キゼヴェツテルの書評の一節、取り上げられているのはトゥルベツコイの冊子『ロシア人の自己認識の問題に寄せて』(1927)である。

自己の真の専門である言語学に訴えるやいなや、この分野でも「ユーラシア主義者」であり続けたいという願望にもかかわらず、良心的な学者であることをやめられぬトゥルベツコイは、思いがけないことにユーラシア主義の教義にとって致命的な研究成果を持ち出す。(Kizevetter 1928: 429)

「ユーラシア主義にとって致命的」か否かはともかく、トゥルベツコイが言語学的研究においては自分の主義主張よりも研究者としての良心と「事実」に忠実だったというのは、その通りではないか。哲学者であり、スラヴ比較文化の権威と見なされていたチジェフスキイは、プラハ言語学サークルのメンバーでもあり、トゥルベツコイを慕い、尊敬していたが、彼もまた「ニコライ・セルゲイヴィチは《ユーラシア主義》の創始者の一人としてロシアの公衆に広く知られるようになった。だが実はトゥルベツコイの《ユーラシア主義》は、各々の問題への独創的なアプローチを示しているという点で、トゥルベツコイの研究活動に固有の特徴をよく表しているわけではない」(Čiževskij 1939: 464)とその追悼文で評している。

6 言語論・芸術論における機械のメタファー

言語論においてトゥルベツコイがユーラシア主義者としての自身の主張を裏切っている事例を、機械のメタファーについても指摘できるように思う。周知の通り、青年文法学派の機械的因果論に飽き足らぬヤーコブソンは、旧来の比較言語学の非体系的な言語観に顕著なアトミズムを「機械的総和」というふうに、「機械的」という形容を用いて批判することがしばしばである。1920年代の著作にはこの形容語が頻出すると指摘するトマンが、その典型例として引用するのは「偶然の一致や外在的要因に起因する機械的集積——19世紀後半のヨーロッパが好んだイメージはこのようなものだ」というモノグラフ「他のスラヴ諸語との比較におけるロシア語の音韻変化についての覚え書き」の一節だ(Toman 1995: 168)。同様の例は、1930年代のヤーコブソンの著作にも数多く見出せる。「文学研究者のイラートは精神分析を『機械的に』援用している」であるとか、「因果律は『機械的な世界観』のカテゴリーである」、「19世紀の自然主義的なアプローチは量と『機械的因果律』の関係を認識するだけである」、「『機械的なアプローチ』が青年文法学派の足を引っ張っている」といった例をトマンは列挙する(Toman 1995: 168)。次に引くのは、すでに1970年になってからの論文「言語の科学と他の諸科学との関係」の一節であるが、「機械的」なる語には依然として否定的なニュアンスが込められている。

現在の学問の対象とする諸現象の集合はいずれも、機械的総和としてではなく、一つの構造的統一体、一つの体系として把握されており、その根本的課題はこれらの体系の静的および動的な内在的諸法則を発見することにある。現在の学問的関心の中心にあるのは、進化の外的な誘因ではなくてその内的諸条件であり、機械的に捉えた起源ではなく機能である。(ヤーコブソン 1978: 149)

機械という否定的なメタファーがアトミズムの枠を超え、比較言語学の根底にある

ダーウィン主義への批判にまで援用されていたことは「ダーウィンやメンデルの生物学理論を言語の科学に移植しようとしたり、言語的規準と人種的規準とを融合させようとしたりする機械的な試みは失敗した」(ヤーコブソン 1978: 191) との断案にも読みとれる。

他方、トゥルベツコイにあっても、「音韻体系は孤立した音素の機械的総和ではなく、有機的の全一体系であって、音素はその構成要素であり、音素からなる構造は法則によって支配される」(Holenstein 1976: 111-112) というように¹¹、体系性を等閑視したアトミズムを批判するにあたって機械のメタファーが用いられる一方で、構造や体系が有機体に喩えられていた。さらに有機体のメタファーは言語の体系性のみならず、「言語と文化の地域的な細分化は、社会的有機体の本質ときわめて有機的に結びついているために、民族的な多様性を抹消せんとする試みは文化の貧困化や文化の破滅を招くであろう」(Trubeckoj 1923: 108) と、言語を超えて文化に——さらには言語・文化双方の多様性にまで適用範囲を広げていた。

ところが、トゥルベツコイは、ロマンス・ゲルマン文化のエゴセントリズムを批判するという自らの基本姿勢に忠実なあまりか、印欧語とは系統も言語類型も異なるチュルク系言語を賞揚する際、文化論ではロマンス・ゲルマン文化と直結するものとして、批判的であったはずの合理性や実用性の概念を——タイゲのようなモダニストによって機械のメタファーと結びつけられている概念を肯定的な特徴として持ち出す。

1925年初出の「ロシア文化のなかのトゥラン的要素について」においてすでに、トゥラン型言語タイプの典型であり典型的な膠着型言語でもあるチュルク系諸言語について、トゥルベツコイは「論理的ないし質料的に正当化され得ない文法範疇は一切存在しない」と力説し、「文法的要素の配列の順序自体も、まとまった意味を持つ語を作り上げる厳密で論理的な規則によって制御」されており、同じ論理的図式性と首尾一貫性が音韻論から統語論に至るまで全ての分野に観察されるとして、その論理性を強調し、積極的に評価する(Trubeckoj 1927:36-37)。

1936年に行った口頭発表に基づく論文「印欧問題についての考え」でも、その考え方は変わらない。少し長くなるが、当該箇所を下に引く。

現在の北コーカサス諸語によって代表される過剰なまでの語尾を有する言語構造がウラル・アルタイ諸語によって代表される言語構造と比較して、はるかに透明性と経済性と利便性に劣ることに疑問の余地はない。今日に至るまで言語学者たちが膠着型の言語を屈折型よりも原始的だと見なしているとするれば、彼ら自身がさまざまな印欧諸語の、とりもなおさず屈折型言語の担い手であるからであり、エゴセントリックな偏見に起因することは明らかである。こうした偏見を離れてみれば、少数の音素からな

る経済的な目録を持ち、語根は変化せず、しかも必ず語頭に位置するお陰で、アルタイ・タイプの純粋に膠着的な言語は、例えば東コーカサス・タイプの屈折型言語より——語根が絶えず音形を変化し、接頭辞と接尾辞の間に埋没してしまっているかのようで見分けることが困難な屈折型諸言語よりも——技術的にはるかに完成度の高い道具である。(Trubeckoj 1987: 58)

ここで糾弾されているのは言語学者たちに根強い偏見だ。確かに、比較文法という用語を初めて用いたとされるドイツ・ロマン派の創始者フリードリヒ・シュレーゲルは、「一つの語根から色々の名詞や動詞の語幹を派生し、母音交代を伴った屈折をおこなっていく有様が、植物が根から枝をはり、葉を茂らせると同じ生態の変化を予想させる屈折タイプの言語を有機体」と見なしていた(風間 1978: 36)。そんなシュレーゲルの言語観は、トゥルベツコイのことば通り、屈折のないタイプの言語など生命や精神と無縁の未発達で下等な言語にすぎぬという価値判断さえ生み出したというが、比較文法がシュレーゲルによって創設されてほぼ 100 年後にその成果を集大成したロマン主義最大の学者アウグスト・シュライヒャーに至ってもなお、「鉱物から植物、そして動物への進化になぞらえて、孤立語から膠着語、そして屈折語という言語のタイプの発展」が想定されていた(風間 1978: 129)。

当然ながら、トゥルベツコイはそうした偏見をロマンス・ゲルマン民族のエゴセントリズムによるものとするのだが、有機体になぞらえられている屈折型言語を批判するためなのか、先の引用文にあらわれる「経済性」や「利便性」という語や「技術的にはるかに完成度の高い道具」という表現は、「機械のアナロジーは、次の信念に——すなわち、美または少なくとも一種の完成した形態は、自動的に最も完全な機械的能率から生まれるという信念に基づく」(デ・ザーコ 2010: 21-22) というように、機能主義建築論に類出するものなのである。さらに、一義的で曖昧性を排除した接尾辞や語尾、語根を先頭に接尾辞、語尾の配列順に関する厳密かつ論理的で例外的な規則などというチェルク系言語の特徴に関するトゥルベツコイの説明は、タイゲが構成主義・機能主義建築論において最も重視した《標準化》の概念を連想させると同時に、伝達を効率的に行うために言語には二重分節が備わっているというアンドレ・マルティネの所論をも——「二重分節によって、限られた数の音素と記号素を一次的に配列するという方法で、言語は話し手の無限の経験を伝達する仕組みを獲得している」(河野・亀井・千野 1996: 1509) というマルティネの見解も想起させる。マルティネのように明晰に定式化してはいないものの、トゥルベツコイが第一次分節のもたらず経済性、効率性に着目していたことは、『音韻論の原理』の中の次の一節に読みとれる。

すべての単語は同じ言語の他のすべての単語と何らかの点で違っていなければならない。しかし言語構成体にはこのような弁別手段が或る一定の数だけしかなく、そしてこの数は単語の数よりもずっと少ないのであるから、諸言語は必然的に弁別要素の組合せから構成されていることになる。(トゥルベツコイ 1980: 12-13)

言語変化の主要な要因についても、マルティネは「できるだけ多くの経験を伝達するために言語の要素の数を増大させようとする人間の要求と、精神的・肉体的な労力を最小にしようという人間の性向という、相反するものを調和させる働きにあるとし、この働きを言語の《経済性 *économie*》と呼んだ(河野・亀井・千野 1996: 1509)。そして、この経済性が二重分節にも反映されているとされるのだが、一見とつきにくいこの考え方も、建築において標準化がもたらす互換性を念頭において読めば、言語学の知識がなくても容易に理解できるのではないか。何よりトゥルベツコイはチュルク系言語について「文法要素の冷徹なまでの経済性は驚くべきものだ」(Trubeckoj 1995: 144)と「経済性」という語まで使用している。目的論との関連で引用した『共時言語学』の断章においても「道具」, 「改良」, 「機能性」, 「経済性」といった用語が使用されていたことも、合わせて思い出していただきたい(マルティネ 1977: 71)。

さらに言えば、経済性の概念こそ建築における機能主義、構成主義に親しい概念である。たとえばタイゲなど、ソ連崇拜が昂じたあまり社会学的傾向の行き過ぎが目立つ「構成主義とソ連における新建築」(1926-1927)において、詩にまで最小努力の最大効果を求めるといふ極論を展開しているほどだ。

成熟した合理的構成主義は、何よりも形式主義の否定を意味し、機能主義が形式主義にとって代わるであろう。建築や機械学だけでなくどこにでも、演劇や詩においてさえ我々がまず求めるのは最小努力の最大効果でもって完全に機能する形態であり、生産物なのである。(Teige 1926/27: 39)

だが少なくともこの引用文からは、話題こそちがえ、経済性への着目という点でマルティネと同じくらいタイゲにも近い発想をトゥルベツコイがしていたという事実が浮き彫りにされる。トゥルベツコイは、「大部分の印欧諸語では屈折の原理が後退しており、もはやコーカサス諸語ほど極端ではない」という事実を踏まえて、「極端に屈折的な言語だけでなく、屈折が穏健化した諸言語と比べても、膠着型の構成はある種の理想を示している」と述べている。そして、膠着型の構成がある種の理想を示している証しとして人工言語の試みを挙げる(Trubeckoj 1987: 58)。

実はタイゲも人工言語に関心を寄せていた事実が知られている。先述のとおり、大

量印刷と大量輸送とスピードの時代において、普遍的な世界語のようなものは焦眉の要請になるはずだとしながらも、タイゲはエスペラントのような人工言語にはまだその能力がないと嘆く。そして、そんな人工語について、「あらゆる機械と同様、技術面において完成までにはまだまだ改良の余地がある」(Teige 1930: 97)と機械になぞらえて語っている。ここに現れている「目的」と「機能」、そしてトゥルベツコイも用いている「完成」という語もまた、構成主義の建築論に類出する。さらに「目的」と「機能」という語は、言語の内的論理を重視するトゥルベツコイに特徴的な《目標論的 teleonomic》な傾向とも密接に結びついていることは言うまでもなからう。およそアヴァンギャルド建築に無縁、無関心であったトゥルベツコイがその成立に絶大な役目を果たしたプラハ学派の機能・構造主義言語学にしても、同時代の機能主義建築論との間に類似点を指摘することはさほど困難ではない。「プラハ言語学サークルの文化的コンテクスト」において、オタカル・ショルティスが、タイゲの文章を引用しつつ次のように述べているように。

「テーゼ」に見てとれる言語の概念と、ル・コルビュジエとピエール・ジャンヌレについての論考でモスクワの政府庁舎《ツェントルソユーズ》がどのように理解されていたかを比較してみよう。「これらの技術的前提から、大半が個々の部屋の機能に従って巨大なガラス面で覆われたファサードか石の板で覆われたファサードをもち、屋根は平らで雨や雪の排水は中央部から行われる、そんな新しいタイプの汎用的オフィスビルが育ちつつある。何と建物全体に1階部分がなく、支柱の上になっただけで、車両が通ったり駐車したりできる。建材の組み立てにおいては、水平的要素が垂直的要素から明確に区別されたり（オフィスの場合）、水平要素が斜めの要素と区別されたりしている（階段および踊り場）。[...] ツェントルソユーズの建物は以下の三つの部分から——すなわち、(1) オフィスビル、(2) 商用・展示用部分、(3) 劇場、映画館、図書館、レストラン、講堂とジムを備えた労働者クラブからなる建築アンサンブルである」(Teige 1929: 20-21)。機能に対する手段の関係、構造に対する機能の関係という問題において、タイゲのこのテキストは「テーゼ」の1の a), b), c) と3の a), b) の定式と直接比較可能だ¹²。たぶん、プラハ言語学サークルの思想の具現化にとってソシュールの『一般言語学講義』の出版がチェコ国内と世界的なコンテクストのなかで作り出したのと同じような基盤を、1919年ヴァルター・グロピウスによってワイマールに創立されたバウハウスが、さらには雑誌『エスプリ・ヌーヴォ』と共にコルビュジエのアトリエが、チェコにおける建築的構造主義と機能主義のために定礎したと言えるだろう。[...] 言語学における正確な概念的思考と意図的にあらゆる装飾性を放棄した思考との間の——建築におけるこの種の思考との間の——照応は容易に証明される。(Šoltys 1991: 199)

7 むすび

亡命ロシア人と正式出国者との交流、さらにはそれらロシア人たちとチェコの文化人たちの交流の場としてのプラハ言語学サークルについては、トマンの著書 *The Magic of a Common Language* が見事に描き出してくれている。またユーラシア主義者としてのトゥルベツコイについても、多くの論文、研究書が日本において発表されていることは周知の通りだ。しかしながら、トマンの著作は広いが浅いとの不満があるし、国の内外を問わず多くのユーラシア主義論はトゥルベツコイがもっとも通曉し、深い関心を寄せていた言語論を避けているように見受けられる。小論においては、大所高所から歴史を論じることを断念し、トゥルベツコイ、ヤーコブソン、タイゲのテクストに密着することを心掛けた。結果としてとりとめない事実の列挙に終始した観は否めないにしても、ユーラシア主義と構造主義との関係を考察したパトリック・セリオのモノグラフ『構造と全一性：1920-30年代中東欧における構造主義の知的源泉について』(1999)¹³ において十分な区別がなされているとは言いかねるトゥルベツコイとヤーコブソンという二人の盟友の所論に幾つかの相違点を指摘できたのではないかと思う。そして、もしも戦間期チェコという時空間における在外ロシア文化とチェコ文化の間の交流とその交流がもつ思想史的意義を——そのダイナミズムを捉えることは叶わずとも、文化人たちの関係として、彼らの思想の布置としていささかなりとも示すことができたとしたら、筆者にとって望外のよろこびである。

【註】

- ¹ 詩人のノイマンは当初はアナキストとして、晩年はスターリニストとして知られたチェコスロヴァキア共産党系の知識人であった。
- ² 反面、マサリクからは次第に信頼を得たらしい。マサリクの80歳の誕生日には、ヤン・ムカジョフスキーと共にプラハ言語学サークルを代表して、祝賀講演を行っている(マテジウス 1999: 392)。
- ³ 亡命ロシア人とアヴァンギャルド芸術は無縁だとする通念が誤っていることについては、諫早勇一『ロシア人たちのベルリン』の第7章の4「イワン・プニーとベルリンのアヴァンギャルド芸術家たち」を参照されたい。戦間期プラハにおいては、プラハ言語学サークルというプラットフォームにおいて稀に見る「共生」が実現したことは特筆されてよい。たとえば、ネズヴァルの著作を批判した保守的なピュリストとの論争をサークル全体が支持したが、そのサークルには数多くの亡命ロシア・ウクライナ人が参加していた(Toman 1955: 162-165)。
- ⁴ 「構成主義と《芸術》の清算」の中の有名な一文「明日の芸術は芸術であることをやめるだろう」は、実のところ『それでも地球は回る』からの引用なのである(Erenburg 1922 :

- 17)。
- ⁵ ヤーコブソン宛の書簡に引用されている『影のなかのロシア』の一部である。
- ⁶ 「トゥルベツコイは、ナチス・ドイツのオーストリア併合後間もない1938年6月、ウィーンでナチスの官憲の追跡を逃れる途中、事故死したものと信じられている」(河野・亀井・千野1996:1480)。
- ⁷ Pëtr Savickij. „Eurazjanizm jako koncepcja naukowa.“ (Separát bez data): 26. ここでの引用はニコライ・サヴィツキーの論文(Savický1991:197)による。
- ⁸ 《発達地 mestorazvitie》は、サヴィツキーのユーラシア論における最も重要な概念とされる。
- ⁹ ヤーコブソンが引いているのは、1927年10月22日付けのヤーコブソン宛書簡の一部(Jakobson2004:109)。ここで引用した『音韻論の原理』からの断章のうち、最後のトゥルベツコイの書簡だけは、ロシア語原文からの筆者による訳と差し替えた。
- ¹⁰ 抽象的理論に対するトゥルベツコイの抵抗感は、ヤーコブソン宛書簡のそこかしこに顔をのぞかせている。この引用文に続けてトゥルベツコイは「言語記号の非対称性についてのカルツェフスキの論文も抽象性の難があって、私には半分も理解できない」(Jakobson2004:242)と述べている。カルツェフスキの論文「言語記号の非対称的二重性について」(1929)は、この一編によってカルツェフスキは言語学史上にその名をとどめることになったとまで評される傑作なのだが(千野2005:237-241)、トゥルベツコイには理解し難い代物であつたらしい。
- ¹¹ トゥルベツコイの次の論文の一部をホーレンシュタインの英訳から訳出した:N. S. Troubetzkoy, “La phonologie actuelle.” *Journal de psychologie*, 30 (1933): 245.
- ¹² 「テーゼ」の当該項目の表題は次の通り:1「言語を体系であるとする考えから導かれる方法論の諸問題と、スラヴ諸語に対するこの考え方の重要性」,1のa「言語が機能的体系であるという考え」(「テーゼ」1999:351),1のb「共時的方法の課題。その通時的方法との関係」(「テーゼ」1999:352),1のc「比較方法の利用の新たな可能性」(「テーゼ」1999:353)。3は「さまざまな機能を持つ言語の研究の諸問題」,3のa「言語の諸機能について」(「テーゼ」1999:359),3のb「文章語について」(「テーゼ」1999:361)。
- ¹³ 筆者が参照したのは2001年出版のロシア語訳である。

【引用文献】

- Čiževskij, Dmitrij Ivanovič. 1939 „Kn'az' Nikolaj Sergejevič Trubeckoj (1896-1938).“ *Sovremennye zapiski*, LXVIII. Pariž. 464-468.
- Èrenburg, Il'ja Grigor'jevič. 1922 *A vsë-taki ona vertitsja*. Moskva: Helikon.
- Holenstein, Elmar. 1976 *Roman Jakobson's Approach to Language: Phenomenological Structuralism*. Translated by Catherine Schelbert and Tarcisius Schelbert. Bloomington & London: Indiana University Press.
- Jakobson, Roman. 1929 „Über die heutigen Voraussetzungen der russischen Slavistik.“ *Slavische*

- Rundschau* 1: 629-646.
- 1962 „Proposition au Premier congrès de linguists.“ *Selected Writings I: Phonological Studies*. The Hague: Mouton: 3-6.
- 1985 *Izbrannye raboty*. sostavlenie i obščaja redakcija V. A. Zveginceva. Moskva: Progress.
- 1995 *Poetická funkce*. Praha: Nakladatelství H&H.
- 2004 *Pis'ma i zametki N. S. Trubeckogo*. Moskva: Jazyk slavjanskoj kul'tury.
- Jangfeldt Bengt. 1992 *Jakobson – Budetljanin*. Stockholm: Almqvist&Wiksell International.
- Kizevetter, Aleksandr Aleksandrovič. 1928 „Evracijstvo i nauka.“ *Slavia*, ročník VII, Sešit 2: 426-430.
- Laruelle, Marelène. 2004 *Ideologija ruskogo evrazijstva ili Mysli o veličii imperii*. Pevod s francuzckogo jazyka T. N. Grigor'evoj. Moskva: Izdatel'stvo «Natalis».
- Liberman, Anatoly. 1991 „Postscript: N. S. Trubetzkoy and His Works on History and Politics.“ Nikolai Sergeevich Trubetzkoy. *The Legacy of Genghis Khan and Other Essays on Russia's Identity*. Ann Arbor: Michigan Slavic Publications: 295-389.
- Savický, Nikolaj. 1991 „O někerých méně známých pramenech Tezí Pražského lingvistického kroužku.“ *Slovo a slovesnost, ročník 52, číslo 3*: 196-198.
- Savickij, Pětr Nikolajevič. 1931 „Opoveščenie ob otkrytii.“ *Evracija v svete jazykoznanija*. Pariž: Izdanije evrazijcev: 1-7.
- Seriot, Patrick. 2001 *Struktura i celosnost': Ob intelektual'nyx istokax strukturalizma v Centoral'noj i Vostočnoj Evrope, 1920-30-e gody*. Moskva: Jazyk slavjanskoj kul'tury.
- Svatoň, Vladimír. 2014 „Marina Cvetajevová – vzkazy do Čech.“ Cvetajevová, Marina. *Verše Čechám*. Praha: Slovanská knihovna: 6-29.
- Šoltys, Otakar. 1991 „Kultrní kontext Pražského lingvistického kroužku.“ *Slovo a slovesnost, ročník 5, číslo 3*: 198-201.
- Teige, Karel. 1923/24 „Ilja Erenburg: A přece se točí!“ *Stavba II*, č. 1: 18-19.
- 1927 *Stavba a básně: umění dnes a zítra*. Praha: Vaněk & Votava.
- 1929 „Centrosojuz.“ *RED, ročník 3, číslo 1*: 20-21.
- 1930 *Svět, který voní 1924-1930: O humoru, clownech a dadaistech*, sv. 2. Praha: Odeon.
- 1966 *Výbor z díla I: Svět stavby a básně, Studie z dvacátých le*. Praha: Československý spisovatel.
- Toman, Jindřich. 1994 *Letters and Other Materials from the Moscow and Prague Linguistic Circles: 1912-1945*. Ann Arbor: Michigan Slavic Publications.
- 1995 *The Magic of Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Trubeckoj, Nikolaj Sergejevič. 1923 „Vabilonskaja bašnja i smešenie jazykov.“ *Evracijskij vremennik, kniga tret'ja*. Berlin: Evrazijskoe knigoizdatel'stvo: 107-124.
- 1927 „O turanskom èlemente v ruskoy kur'ture.“ *K problemy ruskogo samopoznanija: sobranie statej*. Pariž: Evrazijskoe knigoizdatel'stvo: 34-53.

- 1987 *Izbrannye trudy po filologii*. Moskva: Progress: 44-59.
— 2008 *Pis'ma k P. P. Suvčinskomu: 1921-1928*. Moskva: Russkij put'.

- 風間喜代三 1978 『言語学の誕生：比較言語学小史』，東京：岩波書店
亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）1996 『言語学大事典第6巻：術語編』，東京：三省堂
佐藤純一 2005 「ヴィノグラドフ生誕百十年に寄せて」，ロシア語研究会木二会年報『ロシア語研究』第18号：1-10.
千野栄一 2005 『言語学の開かれた扉』，東京：三省堂
「テーゼ」1999 「テーゼ」，山口巖『パロールの復権：ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』，東京：ゆまに書房：351-381.
デ・ザーコ，エドワード，R. 2011 『機能主義理論の系譜』（山本学治・稲葉武司訳），鹿島出版社
トゥルベツコイ，N. S. 1980 『音韻論の原理』（長嶋善郎訳），東京：岩波書店
ボモルスカ，クリスティナ 1983 「後記」，R. ヤコブソン『詩学から言語学へ—妻ボモルスカとの対話—』（伊藤晃訳），東京：国文社
マルティネ，アンドレ 1977 『共時言語学』（渡瀬嘉朗訳），東京：白水社
ムーナン，ジョルジュ 1974 『二十世紀の言語学』（佐藤信夫訳），東京：白水社
ヤーコブソン，ロマーン 1978 『ロマーン・ヤーコブソン選集Ⅱ：言語と言語科学』（服部四郎編），東京：大修館書店
山口巖 1999 『パロールの復権：ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』，東京：ゆまに書房

Two or Three Aspects of the Cultural Context of the Prague Linguistic Circle, Viewed from Jakobson's Friendship with Teige and Trubeckoj

Yoichi OHIRA

One of the most outstanding characteristics of Roman Jakobson's biography is the extraordinary breadth of his relationships with all kinds of intellectuals that is apparent in the variety of his work. He was on excellent terms with Czech avant-gardists, especially Karel Teige, a leading theoretician of constructivist architecture. But the prodigious linguist Nikolaj Trubeckoj was also Jakobson's sworn friend. Jakobson admired his elder friend and trusted him as much as he could trust anyone. Phonology was their common cause and became a hallmark of the Prague Linguistic Circle. Although both Trubeckoj and Teige were Jakobson's good friends, their artistic and political convictions were too different to breathe the same air. Teige was a communist; whereas Trubeckoj was a conservative and widely known among Russian emigrants as a founder of the historico-philosophical doctrine "Eurasianism" rather than a linguist. For contemporary linguistics, the legacy of his Eurasianism has been an "extra-systemic factor." At the same time, students of Eurasianism slight his scholarly works as overly technical discussions, although his linguistics monographs are organically linked with his Eurasianist viewpoint.

The goal this paper seeks is to widen the perceptions of the cultural context of the Prague School by carefully tracing writings of these three theoreticians, and interrelating structural linguistics, avant-garde architecture, and Eurasianism in the interwar period. Detailed comparison of their texts reveals paradoxical similarities and differences both in their artistic and linguistic views.

On the one hand, Teige dreamed of a universal language as a necessity for an internationally integrated world. However, on the other hand, the universal language that interested Jakobson was a transrational (*zaumnyj*) language. While Teige's international auxiliary language had a purely practical function, language creation of in Jakobson's favorite poet Xlebnikov had only a poetic function.

One cannot imagine better joint researchers in the field of linguistics than Trubeckoj and Jakobson. The former, however, not only criticized all the attempts at creating an international language and culture, and held a deep antipathy against the avant-garde arts Jakobson ardently loved. Teige was famous as an advocate of Constructivism and praised the beauty of machines. But Jakobson as well as Trubeckoj always used the epithet word

“mechanical” with as an epithet when criticizing the atomist method of the Neogrammarians.

How critical was Trubeckoj about industrialized European civilization and avant-garde arts with deep roots in such a civilization, he nevertheless unexpectedly used the term “mechanical” with a positive connotations when he values the distinguished logical character of Turkic languages.

Attentive readings of linguistic articles by the two co-researchers reveal differences in their ideological basis. When theoretically-orientated Jakobson seemed indulged in abstract theorization, Trubeckoj, who consistently maintained a corpus-based approach, did not hesitate to admonish the younger friend. While Jakobson dared to emphasize the teleological nature of language changes, Trubeckoj on the whole approved the view that they had a systematic character, but was cautious about metaphysical nuances of in the term “teleology.” As regards “Sprachbund,” Trubeckoj coined the term in order to complement the traditional concept of a “language family,” but he employed both terms for more convincing explanations of language history and did not exclude the possibility of convergent evolution, caused by language contact. Jakobson, on the contrary, considered that the major reason of for convergent evolution of languages essentially was not consisted in diffusion but in the immanent orientation given languages shared.

Indeed it is difficult to give present a clear picture of the complicated Czech cultural context in Czech of the interwar period, but the tracing of the writings of Jakobson, Teige, and Trubeckoj reveals the possibility of reciprocal influences between structural linguistics, avant-garde architecture, and Eurasianism.